

授業方法について独自に工夫していること

- ・毎回、ミニツツペーパーを書かせ、次回授業のときに復習を兼ねて8人程度取り上げ、全体で質問等を共有している。
- ・PPTのスライドに、教員採用試験も意識して「まとめ」の部分をつくり、復習として学生自身に穴埋めを回答させている。
- ・授業の末尾に5～10分程度、必ずグループで討議する時間を設け、その後全体で共有している。
- ・アクティブラーニングとして、ワールド・カフェとOSTの手法を用いて、15回中2回ほど議論・発表をさせている。
- ・レポートは、評価とコメントをつけて全員に返却しており、それを授業でも活用している。
- ・視覚的理解させるため、映像資料を多く用いている。

- ・どの授業においても、学生に資料を配布するだけでなく、授業内容に関係する映像や実践的研究を紹介し、学習内容の定着を図った。
- ・個人的に親しみを感じてもらえるように、臨床実践でのエピソードなどを開示した。
- ・遅刻を予防するために、あらかじめルールを設定していた(3回遅刻で1回休み)。

教員採用試験に関係するキーワードを含んだ内容を扱っている。

受講生の講義へのモチベーションを喚起するような内容をできるだけ用意した。
受講生が講義に対して受け身にならないように、ワーク課題等を導入して、できるだけ主体的に取り組めるように配慮をした。

補助プリントの作成・配布。
新聞記事や各種統計の活用。

授業で使用するパワーポイントは、印刷して配布している。
講義終了後に、授業に関する課題コメント・感想を書かせている。

15回の授業内容がバラバラにならないように、一つのテーマを複数回で学んでいく構成にしている。前回の授業内容が今回の授業内容にも出てくる、という構成にしていくことで、重要な内容を単発の授業で覚えて終わり…ということにならないように心がけている。
また、小グループの活動をなるべく取り入れるようにしている。必ず全員が発言し、レスポンスするように、討議するテーマについての内容をプリントに書き込み、考えを整理させた上で、グループ討論の時間を設定する。

- ・ゼリーを使った味覚実験、ストローを使った古典的条件付け実験、新聞紙を使った構成的グループエンカウンターなど毎回の授業にテーマに沿った実習を入れることで学生の内発的動機づけを高める工夫をしている。
- ・授業の最後に毎回「リアクションシート」を配布している。これを踏まえ、次回の授業ではプレゼンテーションソフトを使い学生の質問に回答し、双方向の授業を心がけている。
- ・受講生の学生時代の「生徒手帳」を持参してもらい、校則についてのグループワークを行うなどの実習を行うなど、学生が主体的に考える授業作りを行っている。

オリエンテーションを含め、毎回の授業で全15回の流れを示し、各回の位置づけを示している。また、各回の内容について構造的に表したものを使いながら、1時間の流れを説明してから授業に入っている。
講義の内容に関しては毎回スライドの出力を配布し、スライドを書き写すといった手の運動はせず、講義の要点や例えとしてあげた事柄を書き取ることで深い理解を行うよう求めている。
講義の最後には振り返りシートの提出を求めているが、単なる感想は受け付けず、講義を聴きながら一歩進んで考えたことや、発展的な疑問として浮かんだことを書くよう求めている。特に、講義が聴き終わってから思考をはじめることを戒めている。

教員養成に関わる科目であることから、教員として受講生が、今後関わっていく学校について職業として教員という視点にとどまらず、様々な角度から学校教育の本質に迫れるように毎回の授業テーマを工夫した。

どの保育活動を説明する時も、保育内容は幼稚園や保育所では領域をもとにまとめられているのではなく、総合的に指導なされていることを、その都度説明するようにしている。

また、保育内容環境には直接関係ないが、幼稚園では5領域、保育所では5領域に加え養護の内容が加わることを常に説明に加えるようにしている。

授業には、実際に保育現場で行われていることを具体的に取り入れるようにし、学生がより興味をもって授業に取り組めるようにしている。

教科書、参考書を紹介し、自主学習に取り組めるように配慮している。

・学生さんが主体的・協同的に学ぶことができるように、4人一組で班を作り、生活科の理論と実践の資料をもとにして、少人数での班の討議や、発表・板書・司会等の役割分担しながら全体での発表など、参加型の授業になるように工夫している。

・生活科の理論と共に、実践事例を通して、生活科についてのイメージがわくような資料の準備を心がけている。

・春の野の探検、スケッチ、大学生生活を支えてくれる人へのインタビューなど、体験型の授業を取り入れるように工夫している。

学年次応じて、また現在トピックになっている教育課程編成上の諸課題や現状を教科の視点を踏まえつつ取り上げていること。たとえば、今期は4年生の初等中等英語・美術・教育科学の学生から構成された授業であったため、現在進行中のH29年度版(見込み)学習指導要領改訂のプロセスやHP上にアップされた資料を紹介し、卒業後に本格的に作業が進む指導要領改訂への意識が高まるように工夫した。特に、それらの中に生活科がどのように取り上げられているかに言及した。

受講人数は50人以上と多かったが、できる限りグループ活動(話し合い、単元構想、指導案作成、模擬授業等)を取り入れたアクティブラーニングを目指した。結果、個々の学生が積極的に記述や発言を行い、意見の還流ができたのではないかと感じる。

・学生に能動的・協働的な学修をさせ、さらに表現力を高めるため、フィールドワークや調査活動の後、パワーポイントやその他の表現方法(模造紙、リーフレット、パンフレット等)により、グループ毎に全員にプレゼンをさせる機会を2回は設けた。2回というのは、1回目のプレゼンの改善や向上をめざし、より内容を高度にするためである。

・思考力・判断力を高めるために授業での課題に対する発言やレポート作成にも力を入れた。また、タイムリーな話題についても授業の頭で触れ、自分の考えを話すようにさせた。

・学生が聞くだけにとどまらないよう、講義の時はできるだけ指名してでも話させるようにし、ノートの記入もこまめにさせるようプリントを工夫した。

パワーポイントの資料を見やすいように工夫している。

授業内容に関連する心理テストや、資料映像をできるだけ取り入れるようにしている。

授業で学んだ知識を応用し、教育の意義や目的について自らの意見を述べることを目指して、毎授業時にグループ・ディスカッションを取り入れている。各回のディスカッションでは、その日の授業で感じた疑問点を明確にし、授業内容をまとめ、また、授業内容を定着させることができるようなテーマを提示している。その上で、論理的思考力をアップさせるためにもディスカッションで行った意見交換を各自がまとめ、リアクションペーパーに記入し毎授業終了時に提出させています。特に、授業参加が受動的にならぬよう心がけながら、各授業で得た知識を、各自がおかれた状況に対して速やかに応用できるような、高度なリテラシーの育成につながる授業展開を心がけています。

テキストを用いることにより、教育実習や就職活動で授業を欠席せざるを得ない場合にも、学生が授業についていけるようにした。理念や基礎的思考方を教科書から学び、その発展をわかりやすいようにパワーポイントや印刷教材で補完した。さらに、理論や基礎的項目だけではなく、時事的社会・教育問題を紹介し、実践的解決場面などや現場での取り組みをDVD等で示すことにより、基礎から発展、応用、学校現場臨床までをも網羅する授業構成にして、多角的な情報・知識・問題解決方法を学生に提供した。また、随所に、学生同士の意見交換や発表などの活動、教員と学生の交流等で、学生の意見をくみとると同時に、教員と学生間でコメント用紙を毎回やりとりすることにより、質問疑問等には、翌週に回答し、疑問の解消およびより深い学びへと導き、集団授業ではあったけれど、学生との交流を重視した授業展開を行った。ただ、一部の学生諸君には、特別支援教育に特化しておこなわれる授業ではないことと、これら豊富な授業要素と教材と活動が与えられていることをもって自覚させるべきであった。

自然体験を中核に据え、特に、小学校の生活科の授業で、必ず行われ、一番多くの授業時間がさかれている栽培活動について、自然観察実習園の畑を借用して、体験を主に実施している。

コメントカードのいくつかの意見をプリントに印刷して次回の講義で配布している
講義中にできるだけ講義室内を回り学生の声をフォーマル、インフォーマルに聞くようにしている
講義中にできるだけペアワーク(問いを投げかけて話し合わせ、発表させる)を取り入れている

子ども同士の人間関係の発達や変化に関する基本的な知識と事例検討だけではなく、保育者が子どもの人間関係に与える影響について教示することも重視している。また、子どもが感じているであろう、素直で素朴な感情を追体験するためのワークを取り入れ、具体的な子ども理解の一助としている。

授業の目標である子どもの発達について最新の知識を取り入れ、パワーポイントなどによってできるだけ具体的に理解できるように配慮した。また、教師の学級経営に関して、リーダーシップの要点を押さえるために、リーダーシップ理論に基づく評定を行った。さらに、生徒や自己の理解を深めるためのパーソナリティ検査を一人一人に実施してもらうことにより、人を理解する方法と実際の手法に触れてもらうように工夫した。
一方、授業の進行過程においては、教師から学生への一方的な話にならないようにするために各授業の中で学生が考え、発言してもらう中でディスカッションに近い形式も取り入れ学生が主体的に参加できるように配慮した。

- ・心理学の基礎的な理論を、学校教育の具体例と結びつけて説明するように工夫した。
- ・パズル形式で心理学を体験してもらったり、グループワークを取り入れて集団過程を体験させた。

生活科についていろいろな面から紹介し、個々の学生それぞれの興味のあるところから、生活科について考えることができるようにと思っています。聞くだけでなく、視覚に訴えたり、実際に活動することも重視しています。

授業中のなかで、授業の内容に関するディベートをおこない、学生同士の討論を行うようにしている。授業の後に、まとめの小レポート書かせている。

- ・学生にとって、話を聞くだけでなく思考する授業になるよう、グループワークや反転授業などの形式を取り入れた。
- ・当初の授業デザインどおりにただ授業を遂行するのではなく、学生の反応を観察したり、声を聞いたりにして、授業を微修正しながら進めた。

なるべく学生どうしの話し合いと発表を入れるようにしています。

- ・グループワークを多く取り入れるように授業構成を考えた。
- ・グループ分けをする際に、毎回同じメンバーにならぬように、また、同じ専攻の学生ばかり集まることがないように配慮した。

本授業は、具体的な活動や体験を通じた栽培活動(野菜を育てる)が主な活動である。実際に学生が畑を耕し畝を作り野菜の世話をしますが、天候による変更や、自然観察園での草花遊び、観察やしおりづくりなどを行い、活動の幅を広げている。

- ・学校心理学や発達臨床心理学の理論・方法論の紹介
- ・事例の紹介および検討,
- ・小説を題材にした課題の設定

- ・講義内ですべて知識を伝えるのではなく、学生が自ら自宅で調べられるようなキーワードを挙げるよう心掛けている
- ・自ら考え、発言できる場を積極的に設けると共に、他者の発言との交流を通じて考えがより深まるという体験を複数回できるようグループワークを多く入れている。
- ・これまでに学習した内容を想起しながら、それと今回の学習がどのように結びついているのか考える場を意識的に設けている。

できるだけ毎回、小テストを行い、その回の理解度を確認するようにしている(必要に応じて次回に補足説明をする)。
知識を問うものではなく、知識を活用するような課題を行うようにしている(特に最終課題)。

今回出された成績について

レポート2回(25点×2)と試験(50点)で評価している。レポートについては、書き方がわかっていない学生が多く、特に1回目の評価がどうしても低くなる(コメントをつけて返すことで、2回目は改善される)。書き方指導をしたいと思うが、授業の趣旨からして適切でなく、断念している。初年次演習における習得を期待したい。試験に関しては、「まとめ」の部分から穴埋め方式で出題している。出題範囲が明確なため平均点が高く、今のような暗記型の試験でよいのか、今後再検討していきたい。

試験を実施したのだが、予想していたよりも良くできていたので、良い成績がついた人が多かったように思う。

今回の学業成績については、試験・提出物・出席状況等を総合して評価した。学業成績は、試験の結果だけでなく、課題レポートや出席状況・日頃の受講態度なども加味して、総合的に評価していくことが必要であると考えます。

2クラス合計で104名の受講者のうち、Dが4名いた。
授業に出席(きちんと受講)しプリントを学習していれば単位は取れたはずなので、とても残念である。

毎回のコメントとテストの結果に基づいて客観的に評価した。

クラス毎に理解力の量的、質的な差があり、説明の詳しさや、具体例の選択などに配慮したが、講義は学生との相互作用であり、授業者個人の工夫だけでは解決しきれなかった。とはいえ、クラス毎に扱う内容や評価基準を変えるのも、教員免許に関わる講義として一定の水準を保つ必要から適切であると考えられず、厳しい状況となったクラスもあった。

また、認知心理学を中心とする教授学習過程について扱っているため、人の心(思考、感情)という抽象的な対象について理解を求めざるを得ず、毎年苦心している。特に、教師という対人援助に関わる仕事につくことを目指しているにもかかわらず、人の心について考えることが苦手な学生をどのようにとらえたら良いのかは悩ましい。

教員養成のための高等教育機関において学習していることから、各受講生の視野に偏りがあるように感じられた。
定期試験で課した課題に対する回答は、いずれも評価点を強く意識した意見が多く、一般論としてある一定の枠に入る論述内容が多いように見受けられた。

多くの学生は、熱心に出席し課題についても誠実にこなしている。成績評価については、まじめに取り組んでいる学生が正当に評価されるように心がけている。一つ、より高い要求をするなら、求められた時に毎回課題を提出する学生は多いが、もう一つ高い視点で、また深く考察をして記述をするとよりよい学びにつながり、成績にもつながる学生が少なからずいた。次回以降、教員からも働きかけたい。

・SやCがあまり多くならないよう、バランスを考えた。
・最終的に1人だけ単位認定が出せなかった。再終レポートが提出期限までに出せなかった学生が全体で7名いたため、総務課からメール配信により、提出を促したところ6名は提出できたのでぎりぎり単位認定をした。

1年生が初めて受講する講義であることを考え、成績は全体的に甘くつけている。
愛教大の学生さんはおおむね真面目で、理解力も高いと感じているが、その分ごく一部のやる気が低かったり、受講態度が悪い学生が目立っている。そのような「特にやる気のない」学生について、どのように評価すべきかについては悩ましかった。

中間小テスト30%、期末レポート70%の比率で成績評価を行った。中間小テストでは、あらかじめ試験内容のポイントを示し、教育における基礎知識や重要事項への理解がどの程度身についているか、確認することを目的とした。しかしながら、一部に事前準備が不十分だったと考えられる受講生も散見され、試験後、期末レポートの評価は厳密に行うことを再度徹底した。

おもに教育相談分野の授業であるため、授業内にて、ディベートやディスカッション、意見表明なども授業の構成要素ではあったが、1クラスの数が多いため、これらのことを評価しづらいのが残念である。本授業は4年生向き授業であるが、教員にならないことを決めている学生は教育相談に関心を持たない場合も多い。興味を持たない、参加意欲の少ない学生がクラス全体の学ぶ姿勢を低下させないようにする必要を感じる。

夏野菜の栽培活動を体験してもらい、実際に教師として指導するとき、「一度やったことがある」といった自信をもって臨んでほしいと思っている。したがって、出席点を全体の半分程度とした。また、栽培活動で身に付けたこと(知識)や教育的意義について、学期末に記述させた。B以上の学生がほとんどで、概ねねらいは達成できていると思う。

同じ授業を行ったが、クラスによって評価が異なる。特に、評価が低めのあるクラスでは授業が3限目のためか最初の方で昼を挟んでの寛ぎの私語が続き、昼食を取るなどの行為があり、注意することによって授業の雰囲気は少々損なわれ、予定したように進まない場合もあった。また、別のクラスでは最初から熱心に聞き入り必ず質問をして来るなど、全体として均一に授業を進めることは難しい面もあるが努力したいと考える。具体的には前者のクラスの様な場合、私語など授業に差支えが生じるような行為に関して、学生への注意や指導はできる限り冷静にまた状況説明を入れて理解を図り、気持ちの切り替えを早くできるように指導していきたいと考える。全体としては授業の内容を伝えることは達成されていると思われるものの、上記の点を含めて幾つかの点で改善が求められると考える。

例年どおり、テストとレポート、およびビデオを観た感想など、多面的に評価した。

・グループワークのウェイトを重くしたため、グループが提出した課題に対する評価が、個人の評価にもなってしまう。この場合、グループ内の個人毎の学習達成程度に対する評価があいまいになってしまう。例えばグループの中で一部の学生が学習に対して意欲的でなくても、他の学生の活躍によって班全体の達成は高くなるということがある。この点をどうすればよいか課題として残されている。

・受講生が児童生徒の学校適応を巡る問題に対する理解の視点を獲得し、対応方法の選択肢を拡充できることを期待して、複数の観点から総合的に評価しました。

評価の一つであるグループディスカッションについては、受講生全員とても積極的に取り組み、回を重ねるごとに自分なりの課題を見つけ、成長できていたと感じている。また、知識面でも学んだ内容について大部分が十分理解できていた。

しかし最終課題で課した論述問題について、事前に自分なりに考えてくるように伝えしたが、どうしても自分の経験や講義内容、あるいは一般論として言われているような表現に終始している学生が少し目立ったように感じた。

これまでに学んだことをつなげて自分の考えを創り上げることももちろん大切であり、その力の育成も本講義の目標の一つではあるが、さらにそこから自分でアンテナを広げ、調べたり考えたり行動した上でレポートを作成する学生がもう少し増えるとよいと感じた。

課題の意図がわかりにくいことがあるので、意図をわかりやすく伝えるような課題文や説明になるように、工夫・改善が必要であると考えている。

アンケート結果を受けて改善したいところ

「問4 授業で習得したことがらについて、自らの表現で伝えることができる」について、「強く・ややそう思う」が50%程度に留まっている。毎回グループワークの時間を設けているが、必ずしも有効に活用されていない可能性がある。話し合いの形態などをもう少し工夫してみたい。

「問9 教員とのコミュニケーションはうまくとれている」の部分について、「強く・ややそう思う」が40～50%程度に留まっている。60人授業なので1人1人と丁寧に関わることは容易でないが、授業中の指名を増やす、グループワークの際の机間指導を充実させるなどして、さらなる改善を目指したい。

・以前の大学では少人数の専門授業が多かったため、学生の授業への関心や満足度が比較的高かった。

本学の担当科目は教職必修科目であり、専門科目とは異なることを今一度ふまえ、「やらされ感」「義務感」を持たれることのないように、ワークやディスカッションを取り入れ能動・主体的に授業に取り組ませることが望ましいと考えた。

・自由記述で「資料の字が細かかった」「知識を与えるだけでなく、学生同士のやりとりを」と書かれていたことを受け止め、来年度は授業内容を精査し、咀嚼できるように心がけたい。

分かりやすく、聞き取りやすい話し方ができるよう改善したい。

授業とは関係のない雑談については、話す内容について十分気をつけたいと思う。

アンケート結果では、授業の難易度と授業内容の量は、「ちょうどよい」とする回答が8割以上で最も多い。また、この授業で新しい考え方や知識・技能が身についたと回答した受講生が、8割近くに達している。出席状況も9割以上がほとんど出席したと回答している。

全般的にみて、学生の受講態度は良好であると判断されるので、今後も受講生が講義に対して、できるだけ主体的に取り組めるように配慮した授業を展開したいと考えます。

同じ授業にもかかわらず、クラスによってアンケート結果がかなり違っている。

しかし同一のしかも必修科目であるため、クラスによって授業の難度やペースをかえることはできない。項目では「教員とのコミュニケーションはうまくとれている」が、比較的低い数値となった。講義形式の授業ではあるが、改善すべき点だと考えている。

教員とのコミュニケーションが不足しているという意見があったが、E科目では60名、E選では200名の受講生がいるので一方的な講義中心になってしまう。意見などを発表して討議する機会をできるだけ取り入れたいと思う。

質問項目の1や5で新しい考え方や多様な考え方ができたという学生が二つのクラスで「強く」「ややそう思う」を含め9割を超えていることは大変うれしい。しかし、もう一つのクラスでは、同項目が7割から8割にとどまっている。そのクラスの他の項目の結果を見ると、授業で提示された文献を参照したり、さらに調べたという項目についても他のクラスに比べて低いことが示された。

大学の講義(15回)だけで、例えば教育方法についてすべての問題を知ることは不可能である。講義内容に触発され、自ら文献に当たり関心を広げていくことが重要になる。上記の結果は、講義内容と授業外での学びをどうつなげることができるか、という課題であり、今後実践課題としていきたい。

このようなアンケートを実施して頂けることで、客観的に自身の授業を見直す機会となり、授業改善に対する意識を高めるきっかけとなります。授業内容の毎年のアップデートはもちろんのこと、「この授業のための週当たりの学習時間」など全体の平均と比べて低い傾向にある項目は今後の課題として改善していきたいと考えております。

個人的に、大学の講義は学生にとってほんの少しだけ高度であると感じられる程度が適切であると考えている。そうすることで、より広く深く学ぶ必要性を感じ、その後の主体的学びにつながっていくと考えられるからである。ただ、そのためには、学生が興味を持てるテーマを精選し、かつ狙った難易度の内容や教材、方法等をとらなければならない、今後も工夫が必要であると考えている。(概ね想定通りのことは出来ているとは思っているが)

また、学生(や教師)に対する期待が強すぎるせいか、高いレベルを求めすぎているのかもしれないといつも反省している。少なくとも、学生達に実力を伴った教師へと成長して欲しいと願っていることを理解してもらえよう努力したい。

毎回のテーマに対するアプローチの幅と深さがありすぎたようであり、受講生からは、まとを絞れないことから、理解しづらい、との意見が出された。したがって、より受講生に受け取りやすいように、提供する内容を減らす工夫をしたいと思っている。また、一部の受講生とのコミュニケーションが大きいとの指摘もあるが、授業内における言葉のやりとりの頻度の問題から、今後は十分留意する所存である。

ほとんどの学生が積極的に授業に参加した。その熱意に、教師の方が助けられたと思っている。まさに授業は学生と教師の相互作用で、質も高まっていくと思う。今後も、できる限り保育現場の最新の情報を用意するとともに、すぐにでも子どもと一緒に遊べ、学びのある教材の紹介ができるように努力していきたい。

・問3の「授業を受けての調査・新たな思考・行動」という項目が一層身に付くような授業のあり方を研究し、授業改善に努めていきたい。
・学生さんの主体的な参加を願って、班での討議や全体での発表・討論を授業に組み込んでいるが、話し合うことの意義や討論の仕方、コメントの力などを練り上げるように努力していきたい。
・中間レポートや講義感想など、学生さんが自ら学んだことを振り返り書き綴ることを重視して位置づけているが、さらに書くことの意味づけや書き方などの工夫をしていきたい。

アンケートからは、問3の発展的な思考の展開およびそれに基づく行動について、必ずしも十分でない回答が寄せられた。このことは前項にも記したが、課題を求める際に、もう一段の工夫や深い思考を促す働きかけを行う必要があると考えている。生活科の課題は、一見単純で活動的に見えるものの、その奥には深い観察や思考、気づきを求めるものが多い。この点についての促しが不足しているように感じられるため、授業中はもとより、課題提示時に配慮したい。

学生は講義を熱心に受けてくれたが、学んだ内容や課題についてさらに追究し深めていけるように、課題提示方法や追究意欲向上策等について考えたいと思う。

・なぜタイムリーな話題に触れるのか、なぜプリントに書き込むのか、理解できていない学生がいたため、説明は何回かする必要があったと思われる。
・講義で提示したパワーポイントの内容が照明の関係や細かすぎる等の理由で分かりにくいところがあったと思うのでもっと分かりやすいものに工夫改善したい。
・授業後の学生とのコンタクトや質疑応答などの時間をもっと多く取れるようにしたい。

授業内容は平易なものにしているため、学生からは難易度や進行はちょうどよいという意見が多かったように思う。一方、授業外に学習した学生が大変少なく、この講義に対する積極性や意欲は低いのかも感じられた。少なくとも、授業時間内は集中して、より積極的に学習に取り組めるようにし、この講義をきっかけに他の心理学の学習への意欲が持てるように工夫をしていきたい。

・新入生である1年前期に「教育原論」という内容を扱うこともあって、「内容が難しい」「ちょうどよい」という感想がほぼ半々にわかれている。内容のレベルを下げるのではなく、より理解しやすい授業展開を効率よく図っていききたい。

・特に、週当たりの自学習時間の水準を上げるためにも、授業復習を積極的に行えるような課題提示を心がけたい。

・1限・2限の授業であっても、ほぼ遅刻者はおらず極めて高い出席率であったことは、受講生の積極的な授業参加と受け止めています。

今回使用した教科書が、全面改定のため来年度は使えないかもしれない。新しい教科書では、改善が必要になるかもしれない。ただ、授業目標をもっと学生に自覚させてもよいのではないかと思っている。また、1限目の特別支援専攻と書道専攻では、専攻のニーズが違うため、本授業が特別支援教育に特化した授業ではないことを学生にもっと広報する必要があると思う。あるいは、クラスを分割する必要がある。対象により、ニーズや教育方法が違ってくるところもあり、受講者の満足度も違う。

概ね肯定的な回答を得ている。気になるのは、問2・問3が「③どちらともいえない」が、40%代が多い。授業形態が、授業の最初に当日の作業内容やその意義を伝え、実習にはいつしてしまうので、自ら資料を検索する機会は少ないからだと思う。今後は、前時の最後に次回の作業内容を伝え、予習させるように改善したい。ただ、今回の体験した栽培活動をもとに、自ら栽培活動を行うときに、検索などはすると思われる。また、問9の学生とのコミュニケーションである。40%弱が、「どちらとも言えない」と回答している。50名をこえる実習であると、なかなか密なコミュニケーションを取るのは、難しい。30名程度が理想である。問14の授業回数で、「多すぎた」が40%弱ある。夏野菜の栽培活動なので、8月後半にも一度実施し17回実施しているためであるが、しかたないことだと思っている。

3クラスのうち2つのクラスで、問3(自分で考え、行動した)の「強くそう思う」の割合が科目平均を下回っていた。学生が自分で考え、行動するような授業に向けてさらに工夫を重ねたい。

問1、問5の回答から授業の内容に関しては全体として理解してもらえていると感じる。しかし、技術的方法としての話し方、コミュニケーションについては少々不足気味であると感じる。このことに関しては、1クラスの受講生が60名近くであることも影響していると思われるものの、授業を通して学生個々の状況を把握するように努めると同時に、内容の把握状況を理解するための方法を検討したいと考えている。特に、質疑に関しては学生自ら発言することが少ないので、コメント用紙に授業内容の質問と同時に感想、要望など学生の考えていることを反映させて授業を展開することが必要と考える。また、授業の中で質問タイムを取るなどの工夫が考えられる。また、授業中の私語など迷惑行為への対応については授業の最初により明確に伝えておき、授業の進行に影響しないようにすることも改めて必要と考える。

今後は、自宅学習を踏まえた講義を展開していきたい。

話しが聞き取りにくいとの指摘があり、マイクを使うことを考えています。

小レポート用紙を返す際に、今後はできるだけコメントを書いて返却するようにしたい。

・途中で1回、私自身が体調を崩して休講にしまったり、昨年どおりには設備を準備できなかったためグループワークの形態を変更したりと、学生を振り回してしまったことを反省している。そのことは様々な点で学生の学習に対する悪影響を与えてしまった。やむを得なかったとはいえ、今後は細心の注意を払いたい。

・講義形式で、こちらから一方的に話す場面が多かった授業では、学生が下を向いたり居眠りしていたりして、うまくいったとは言えなかった。しかしそれらの授業で伝えるべきことが、その後のグループワーク等に生きてきて初めて全体の授業が有意義なものとなるはずであるので、今後は講義形式の部分にもう少し工夫を加えたい。

・質疑応答の時間をより多く持ち、学生とのコミュニケーションを図っていきたい。

問3、問8の③どちらともいえない、をどうとらえるかであるが、少しでも学生にとって意欲的に活動できる内容にし、何が一番効果的で有効な手立てになるかこれからも工夫し考えていきたいと思っている。ただし、問8の板書...については、一限の授業はほぼ教室を使わない(使えない)ので、野外移動黒板等があれば、少しは改善できると考える。

- ・一回当たりの授業内容の量・話すスピードの調整
- ・授業外課題の充実
- ・コメントシートの活用

上記にも書いたように、この授業のための週当たりの学習時間が少なかったことに加え、難易度や授業で扱われる量が多いという結果を踏まえ、もう少し講義外で学習すべき内容を増やして提示していきたいと考えている。ただし、課題だから学習するという受動的な動機づけだけでは本来講義で目指す力は育たないと考えているため、自ら学習したものに対してクラスで取り上げたり、評価することも同時に行い、積極的な学習姿勢を身につけてもらえるよう工夫していきたい。

また、質疑やコメント用紙の活用についても工夫しているが、まだ十分ではないと感じている学生もいるようなので、やりとりが細かくできるようコメント用紙のフィードバックのタイミングなどを検討していきたい。